

一九三五・五・No.75)で三光町佐知、宇佐市山口、豊後高田市、杵築市、大分市の野田・宗方・胡麻鶴等の谷筋産地をあげている。

6 編組統一用語は、その後次の図書で複製された。

日本工芸技術協会「編組」デザイン資料 昭和53

年3月

地頭竈門氏について

土屋 公照

述べてみたい。

竈門荘の成立

源平の争乱を書いた「元暦文治記①」という本の中に竈門荘の成立について、次ぎのような記述がある。

「内竈」と呼ばれている地名字がある。亀川にある国立別府病院・亀川小学校・亀川駅など新川以北はほぼ大字内竈である。此処の地名は本来は「内竈門」であった。その地名の意味するのは古代・中世と宇佐八幡の神宮寺である弥勒寺の荘園であった「竈門荘」の中央部に位置するからである。

かって、鎌倉・室町・戦国時代にかけてこの竈門荘を中心に勢力を張った豪族竈門氏や竈門荘について考えを

7 四海波は、毎年四月上旬朝見神社の拜殿で行う竹まつりの「献籠の儀」に使うため神楽殿で白装束の工人が青竹で作る四つ目底の大型カゴです。又観光宣伝の竹カゴ教室でミニチャーの四海波が教材になっています。

一寺領之事 豊後国南北浦部十八ヶ所 此内竈門

荘百町者 聖武天皇天平勝宝元年己丑六月二十

日被載宸筆御起請文畢 最初御奉寄之間 異干

他寺領也

つまり、竈門荘は、宇佐弥勒寺領の内でも、聖武天皇の御起請文により寄進されたもので、他の寺領の荘園と成立が異なるという。ところで、この起請文は「八幡宇佐宮御託宣集」に、聖武天皇が天平感宝元年（七四九）「弥勒寺学分として綿一万屯・稻十萬束・墾田百町歩を寄進した」とある。また、月日を同じくして、「毎年八幡封民一人（天慶三年以降三名）を太宰府観世音寺で得度させて、宇佐八幡の神宮寺である弥勒寺に入れ」るよう取りはかっている。つまり、竈門荘は、弥勒寺の社僧を宇佐氏族から養成するための学費を賄うために寄進された荘園である。朝廷の後押しで、八世紀から九世紀にかけて成立する荘園を「初期荘園」と呼んでいるが、特に天平勝宝（七四九）より神護景雲（七六九）頃は、朝廷の仏教興隆政策と結び付いた寺院が積極的に在地進出を行なっている時期であり、竈門荘もこの系列であろうと思われる。もし、そうだとすると竈門荘は豊前・豊後を通して最初の荘園ということになる。

ところで、竈門荘の広さであるが、弘安八年（一二八

五）作成の土地台帳「豊後国凶田帳②」に

竈門荘八十町

地頭

本荘五十三町 御家人竈門又太郎貞継法師

法名 道善

小坂村十七町 大將家法花堂別当僧都 御房

平湯立小野村十町 鶴見村加納

大友兵庫入道殿

とあり、およそ北側は別府市小坂、日出町小浦。南側は鉄輪、平田の範囲が竈門荘の荘域と考えられている。

竈門氏とは者か

竈門氏の出自については、大神説と宇佐説の二説がある。

まず、大神説は、江戸時代後半に書かれた「豊後国凶田帳考証」で著者の後藤碩田が述べた説で、竈門氏として最初に出てくる竈門貞継の「貞」の字を大神氏が多用していることから「竈門は大神氏族也、系不祥」としている。速見郡に多い大神氏を本姓にしたのではなからう

か。

いまひとつの宇佐説は、「宮師文書」の竈門飛驒守宇佐宿禰繁継や「柞原八幡宮文書」の竈門右京亮宇佐宿禰鑑述などは宇佐の出身で、それぞれ豊後一宮由原宮の神宝調達役として宇佐宮とのつながりも深く、仏神事に造詣が深かったので宇佐宿禰を名のったのであろうか。

しかし、この二説はいずれも根拠が薄く俄かに肯定しにくい。

竈門荘の地頭職に関する史料の初見は、建久八年（一一九八）作成と推定される土地台帳「建久凶田帳③」である。これには竈門氏の姓はなく、

竈門郷 百余町 弥勒寺領 預所 慶禪

地頭 漆嶋つるしま定房

とあり、地頭は漆嶋氏である。この漆嶋氏と竈門荘の結び付きについて私見を述べると以下のようになる。

漆嶋氏は、宇佐八幡宮の八幡神の成立以前に宇佐神と合流した香春神を祀り、豊前地方の開発に貢献したといわれている渡来人系辛島氏の後裔ではなからうかと考える。

荘園の開発は、たんに土地を占有するだけでは成り立たない。三世一新の法にも「溝池を造り開墾を営む者有らば」とあるように、水利灌漑・圃場工事や倉屋の建築などの大規模な工事が必ず要請される。百町歩にわたる墾田の開発は当時にあつては難工事であつたであろう。そのために技術者・責任者として宇佐より漆嶋氏が派遣されたことは考えるにたかくない。

漆嶋氏は竈門荘の開発に業績を挙げ、土着して強大な権力を持つに至つたのではあるまいか。

建久の凶田帳が作成された頃は、鎌倉幕府の勢力が着々と九州の地に進出して来る時期である。

つまり、幕府は平氏の有力家人であつた者に対しては所領を没収し、在地の中小士族に対しては寛大な処置で家人化政策をとり、「鎌倉幕府の鎮西支配体制が安定確立した時期は建久年間であつた④」と言われている。

漆嶋氏もこの時期に鎌倉殿の御家人になり、地頭職に取り立てられたのであろう。

ところが約九十年後の「弘安凶田帳（一一二八五）」に竈門荘八十町 弥勒寺領

地頭

本荘五十三町 御家人 竈門又太郎貞継

法名 道善

とあるように竈門荘の地頭職の姓が「漆嶋」より「竈門」に変わっている。このことについて、豪族間の禪譲あるいは抗争の記録や伝承もないので、姓のみ漆嶋氏より竈門氏へと移行したものと考えられる。

弘安の頃は元寇をさかいとして幕府の権力が動揺し、所領に対する御家人の強い執着が顕著になり、地頭職漆嶋氏が本拠竈門荘の地名を名乗るようになったと考えるのが自然であろう。

竈門氏の拠所

五山文学新集⑥ 東海一瀧集 海眼庵記に、五山文学の隆盛の基を築いた中岩円月が、豊後で漆嶋氏の僧闍慧といろいろ話しあったことが書かれている。

……置隆国府 府之東 沿海有邑 曰竈門 為宇

佐宮祭祀烹飪之所也 邑之上游有山 名葉室 又

称羽 盖以倭俗呼羽為葉也 漆嶋氏世居焉 羽室

山有窟廡 名曰海眼 不知何年誰創焉 漆嶋氏之

子 有闍慧在此 以辟元弘・建武之乱 ……

大意は、「……国府の東（北）、海に面して村があり、竈門といい、宇佐宮祭典の御供料を出す所である。村の上に山があり羽室又葉室といい、この名は昔から使われている。ここに漆嶋氏が住んでいる。この羽室山に庵があり名を海眼といい、何時誰が建てたか分からない。今は漆嶋氏の一人闍慧と云う者が剃髪して此処に住んでいて、元弘・建武の乱を避けている。……」

この、海眼庵記によると、竈門荘内の羽室に漆嶋氏が代々住んでいて、その一人が僧となり海眼と云う庵を結んでいると云う。このことは、羽室の台地に竈門氏の居城があったと云う伝承と合致し、此処にはまた竈門氏の墓地もある。

庵については、別府市小字図を見ると小字羽室に東接して「大恩寺」と云う小字がある。江戸時代に書かれた『豊陽古事談』には、「羽室山多恩寺」と云う寺があるが、縁起には、在速見郡竈門荘野田村葉室山上、此寺養老中仁聞菩薩所創也、とあり大恩寺と多恩寺とは同一で



地墓氏門竈社靈台室羽

(墓の善道端右)

はないか
と思われ
る。筆者
中岩円月
和尚が訪
れたであ
ろう「海
眼庵」と
はこれを
指し、闍
慧は此処
で漆嶋氏
(竈門氏)
の先祖供
養をして

漆嶋氏は土着して在地支配権を握り勢力を伸ばし、やがて、武家社会の到来とともに御家人竈門氏となり、守護大友氏の被護をうけ竈門荘で権力を振るったのである。

竈門氏の動き

応安七年(一三七四)、山香郷の花嶽で南朝方が挙兵した。この時、北朝方の大友一族田原氏能らが駆け付け攻略したが、この田原軍に竈門彦次郎・彦三郎が従い、彦次郎が左腕と肩に、彦三郎は頭に傷を負っている。

(入江文書)

いたのではないだろうか。
竈門荘の地頭竈門氏の出自は、高度の土木技術を持った渡来人集団のリーダーで、弥勒寺に下賜された荘園開発のため、宇佐より派遣された辛島系漆嶋氏であろう。

永享七年(一四三五)大友氏を二分する争乱があった。姫岳(臼杵・津久見の境)に籠城する大友持直(十二代)軍と、これを攻める親綱(十三代)軍が戦った。両軍には父子・兄弟、あるいは一族が敵味方に分れ参戦したが、竈門氏の動向について、親綱軍の姫山着到次第には「竈門松徳丸代」とのみある。父親が一族を引き連れて持直軍に参加しているのだろうか。攻める親綱軍には、松徳丸を振り当てたが、おそらく松徳丸が幼少のため代人

を指しむけたのであろう。家名保持のためとは言え竈門氏の苦慮のあとがみえる。
(大友家文書)

天正十四年(一五八六)七月島津氏の大軍が筑前に押し寄せた。五万の島津軍に囲まれた太宰府岩屋城の守りは、城主高橋紹運を始め僅か七百六十人ほどで、激戦のすえ全員城を枕に討死にした。この中に高橋越前守がいる。この越前守は、元竈門勘解由允であるが天正十三年に大友義統より高橋紹運の名字をいただき、高橋に改めることを許され越前守に任じられている。その子息に竈門典楽允がいて、義統より父越前守の跡目として筑後国の領地の相続を認められている。典楽允が後の竈門土佐入道であろうか。その子息であろう小治郎と共に朝鮮に出陣している。
(大友家文書)

また、慶応四年竈門八幡宮の神社取調帳⑦に「弘安ノ頃竈門ト申ス社家有之候へ共国主大友家ニ仕へ 天正十四年十二月戸次川ノ戦ニ出陣シ 長會我部信親などト共ニ討死スト聞及申候」ともある。

消えた竈門氏

文録二年(一五九三)朝鮮の役での失敗により大友氏は除国という結果になるが、大友氏と共に竈門氏も忽然と消えてしまう。

ただ、竈門氏を偲ぶよすがとして、居城があったと伝えられる羽室台の「御霊社」の裏てに竈門又太郎貞継法師道善の墳墓をはじめとする墓地がある。

享和三年(一八〇三)に書かれた「豊後国志」に
源為朝妻妾墓

在竈門莊野田村葉室山 古石塔十二列立其制皆同

相 伝此地為朝館址 其石皆群妾乃墓也

とあり、葉室台地は為朝の居館址であり、そこに妻妾の墓があると書いてある。また、明治二十年の「御越村社寺調査帳⑧」には、保元元年十一月奉祀ト古老ノ口碑ニ伝ウシ」として、御霊社の祭神が源為朝あり、どうじに竈門氏の墓塔群を為朝十二妃の墓とすり変えてしまったようである。

古来、憤死など非業の死を遂げた者の死霊が、怨霊となり疫病・天災・虫害などさまざまなタタリをなすと考え、御霊を祭り鎮めるといふ御霊信仰があった。忽然と

して消えた竈門氏の末期に、怨霊となるような不吉な伝承があったのであろう。鳥居、燈籠、水船の銘文によると、享保年間に野田村一村を挙げて竈門氏の墓所に御霊社を創建したようである⑨。当時、度々襲ったウンカの虫害のタタリを鎮めるためではなかるうか。

「御霊社」と祭神源為朝の取り合わせについては、源為朝が地頭竈門氏の主筋にあたる源氏の祖であり、しかも庶民の英雄である為朝が、怨霊柝伏には最もふさわしい祭神であったのではなかるうか。

① 中山重記氏はこれにより壘田の施入地を竈門

荘とした。

②③ 大分県史料 1・36

④ 中野幡能著「八幡信仰の研究」

宇佐市史刊行会「宇佐の歴史」

⑤ 瀬野精一郎著「鎮西御家人の研究」

⑥ 文和二年（一三五三）から一年間大分の万寿寺

の住持となる。

⑦ 土屋内彦書 筆者蔵

⑧ 土屋範二書 筆者蔵

⑨ べつぷの文化財「羽室御霊社の塔をめぐる」

文書の解読

西国筋郡代昇格

我等儀岡田庄大夫以来引続出精相勤候ニ付 今般西国筋御郡代布衣被仰付 其上我等養太夫両家之内ヨリ永々支配可致旨被仰渡候間 弥以兼々申付候御仕置筋厳重可相守候 此廻状早々順達庄屋組頭百姓代次添請書

令印形留り村ヨリ最寄御役所へ可相返候也

亥 七月

揖十太

速見郡村々

庄 屋

組 頭

百 姓 共

襖の下張りからとても貴重な史料が出てくることが見えます。この文書は、旧家（旧中石垣村）の襖から発見